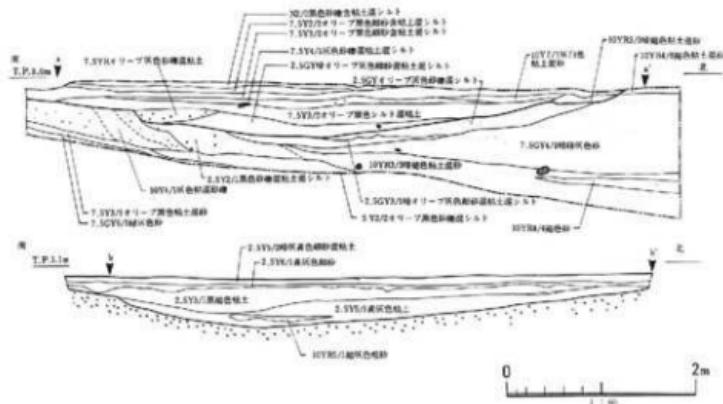


第18図 II区72・73-OR平面図



第19図 II区72・73-OR 土層断面図

の一部には焼けたように見える砂が含まれ、ごく微量の炭化物も混ざって、有機質のシミのようにも見えた。

変色部分にある砂は、周辺の砂と同質の細砂で、変色の厚みも不鮮明であり、形としてこれを認識することはできなかったが、何らかの生活の痕跡を示していると考えたい。この縁辺では、サスカイト剝片や、土器片がまとまって検出され、そばの流路内堆積土中からも土器片が集中的に検出されている。

72 · 73 — O R (第18 · 19回)

II区の南半を東から西に平行して流れる自然流路である。南側の流路を72-O R、北側の流路を73-O Rと呼ぶ。遺物の出土状態と埋土の状況から、不確定な要素がある72-O R南端の一部を除いて、両水路とも遅くとも古墳時代以前に埋没していたと思われる。

72-ORは東側で幅3m、深さ0.3(TP+2.7)m、西側で幅9m、深さ0.9(TP+2.3)mの規模をもつ。流路内地植物は植物遺体を多量に含むオリーブ黒色シルトの厚い層と細砂・中砂からなる。砂層は河川の両岸からシルト層中に流れこんだ形跡を示し、岸寄りの斜面で厚く、流路中央では薄い層となって砂層が途切れている所もある。砂層の途切れた部分では同質の黒色シルト層が上下に連続的に堆積しており、わずかに植物遺体が面的に広がっている範囲をのぞけば、上下の分層を確實には行えなかった。このシルト層の上半と、その上層の砂層中には、縄文時代晩期の土器が含まれている。

晩期の流路底と考えた面は、土器の出なくなったシルト層のレベルと流路中央で途切れ

る砂層の延長線をもとにしたものである。この流路底になっている黒色シルトの下半にあたる層はわずかに傾斜しているものの、ほぼ水平に堆積して縄文時代晚期のベースになっている砂層(第9層)の下に潜り、III区にまで広がっている。したがって、ここで晚期流路としたものは、段丘下の海面後退期以後にこの一帯に形成された沼沢地が西の浜側から徐々に埋まり、段丘直下に細い流路となって変容していく過程の一時期を出土遺物によって認識できただけのものと言うべきであろう。晚期土器の流入期には流路内堆積物の表層の歓らかい部分が一部削られて、ゆるい流れないしは滞水した状態になっていたと思われる。

73-O Rは、第9層の砂層が形成されて後にできた流路である。東側で幅約2m、深さ0.4m、西側で幅約7m、深さ0.6mを測る。流路の埋土は黄褐色系の粘土・シルト(第8層)を主とし、舟底状の溜りになっている部分では、最下部に細砂・微砂が部分的に堆積していた。流路上層の埋土は73-O Rとその東寄りの凹地付近にのみ認められ、面的には広がらない。この土層の遺存状態は、流路の埋まる過程に関係するものか、後世の削平を想定する必要があるのか解釈上の余地を生むものである。

(田中)

遺物出土状況

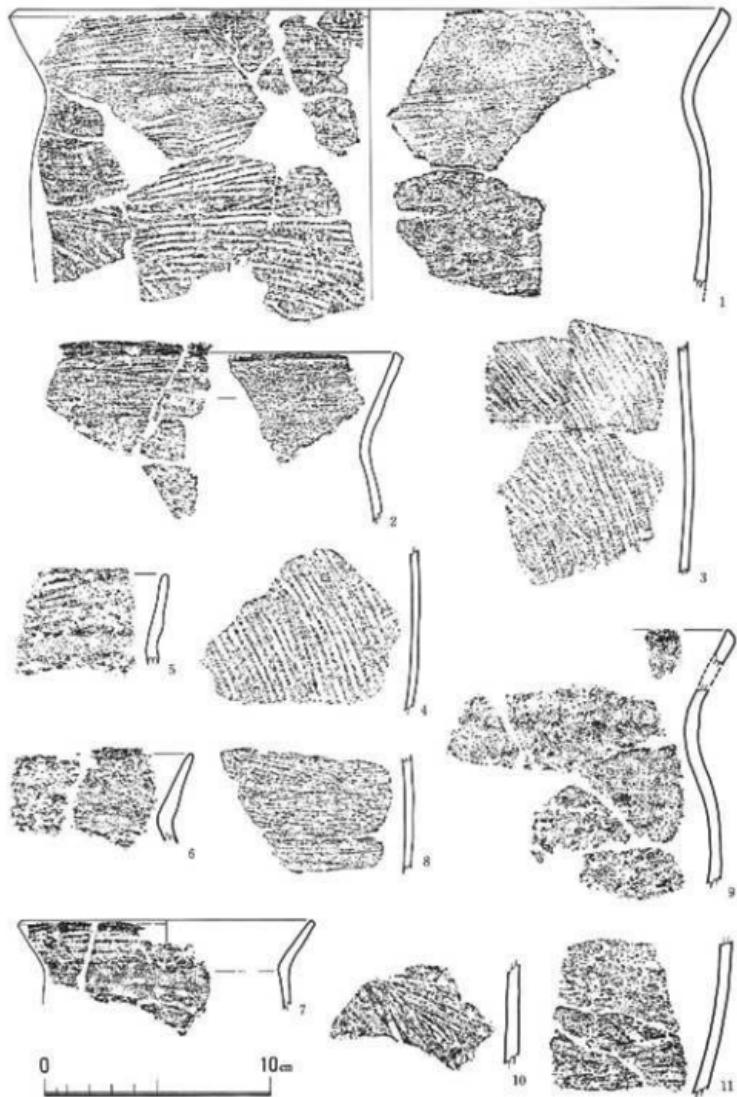
検出された遺物には、縄文土器、磨製石斧、サスカイト製石器各種、剝片がある。土器と石器では出土地点に差があり、土器が73-O R以南の西半部でブロック的に出土するのに対し、石器はA25P U付近に一つの集中点をもち、II区全域から少量づつ出土している。

土器は、72-O R西寄りの北側斜面と、その肩部上端付近の砂層中に最も多くみられた。肩部上端付近では、有機質の浸透によって変色した周辺に集中する傾向があった。73-O Rでは中程のTP+2.7mの浅い凹み(第18図)に器表の荒れた土器が集中していた。2本の流路に挟まれた部分では、第9層の上面に食い込んだ状態で出土している。72-O R内出土のものは、5~10cm程度の破片となっているが、A25W O付近では磨耗が若干あるものの口縁部・体部片がみられ、接合関係も良好であった。一方、73-O R内遺物はいたみがはげしく、実測、手拓の困難なものであった。流路内出土の遺物は、第9層と近似する砂層中から検出されるものもあるが、基本的に2本の流路に挟まれた高みから流れこんだものと判断される。

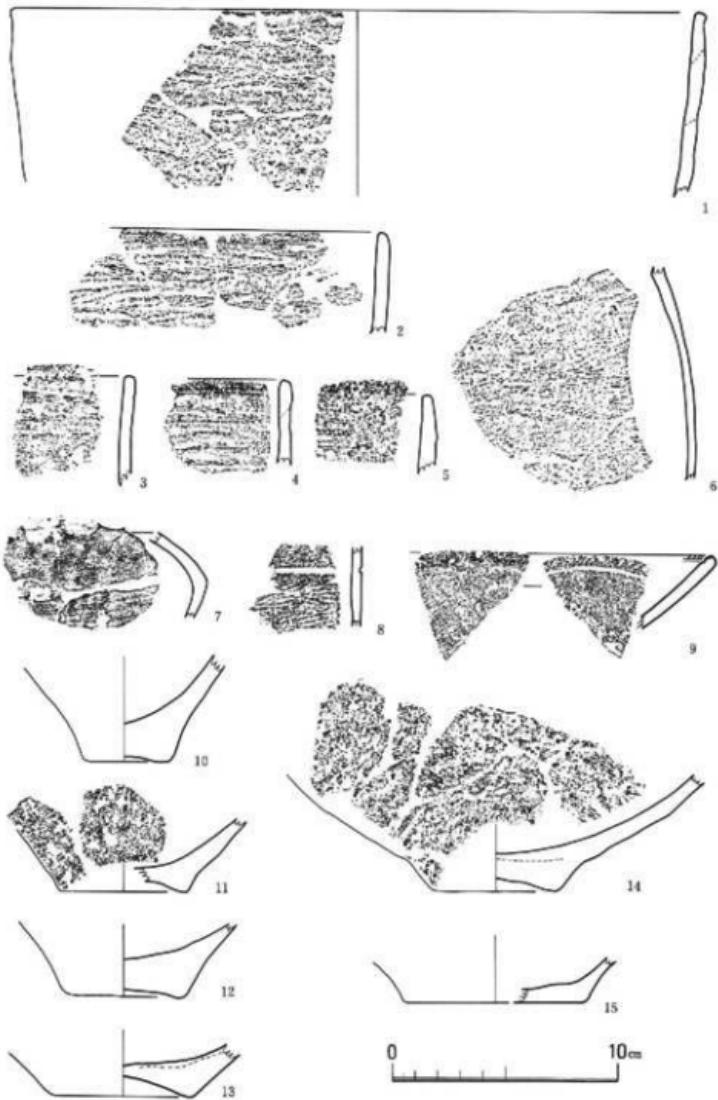
刃部が欠損した磨製石斧は72-O R内のA25X Q、TP+2.5m付近のオリーブ黒色砂混シルト層で出土している。接合する剝片がその西寄りでもう一点出土している。

サスカイトの石製品には石錐、石錐、石匙がある。石錐、石片は2本の流路に挟まれた第9層の高みで出土するものが多く、石匙は、1986年度調査区で出土している。

(田中)



第20図 麻文土器拓影・実測図



第21図 縄文土器拓影・実測図

土器（第20・21図） 繩文土器は約200片出土しているが、個体数にすれば、10数個体程度である。永く浸水状態にあったためか、もろくなつて接合復元の困難なものが多い。遺物の出土状態から、72・73-O R内と外で出土したものを見分けることを図示した。ほとんどが条痕、削り痕をもつ深鉢形土器で、他に有文のもの1点、浅鉢形土器3点がある。

深鉢形土器は、同一個体と思われるものを除き、口縁部は全て図示した。頸部がくびれるもの（第20図、第21図6）と直口のもの（第21図1～5）がある。外面に条痕を施しているものが多く、第20図（9～11）・第21図（1・2・6）は削り痕がみられる。第20図（1・2）は口端部の形状がやや異なるので別に示したが（3・4）とともに同一個体である。第20図（9～11）・第21図（1・2）もそれぞれ同一個体である。

第21図（8）は横位の沈線の下にやや不鮮明ながら細い条痕がつく。図示した上端部は荒れていますので確かな判断ができないが口縁部になるかも知れない。

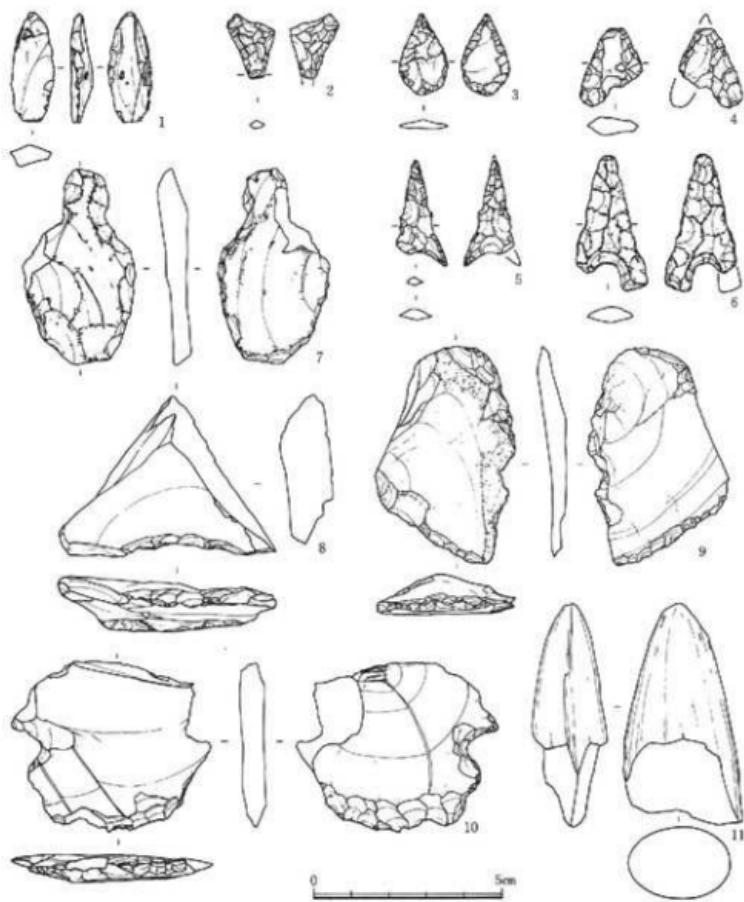
浅鉢形土器は図示しなかったが、張りの強い肩部をもつものが1点ある。第21図（7）は内外研磨され、同（9）は口縁内側に細い沈線をめぐらせ、その上位に刻み目を施している。

底部は8点中6点図示した。1点を除きいずれも凹底である。第21図（15）は、非常にもうろく、現場で取り上げる際に表面が剥離した。他の土器と比べ均質な胎土で、色調も全く異なり黄褐色を呈す。二つの流路間の細砂中から出土した。他の土器と同一時期のものかどうか問題があるが、第9層上面の継続期、埋没期を示す材料になると想え、図示した。

これらの土器は赤褐色系のものと、明黄褐色系のものがある。第21図（15）を除くと1～4mm大の砂粒を多く含み、第20図（5）・21図（10～13）には、3mm前後の角閃石と思われる鉱物、石英粒などが砂粒の主体をなしている。

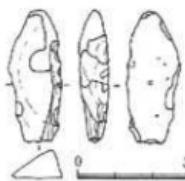
この土器群は1、2様相を異にするものがあるが、基本的には同一期のものと考えられ、突帯文の土器が全く含まれていないことから、晩期中葉頃のものとしておきたい。（藤田）

石器（第22図） 硬質砂岩製の磨製石斧1点と包含層よりサスカイト製の打製石器10点が出土した。法量は残存している部分の長さ×幅×厚さcm重量gの順。凹基式石鎌の長さは基部まで逆刺は含まない、逆刺端部までの長さは（ ）内に記した。（1）は法量（以下省略） $2.92 \times 1.13 \times 0.57$ cm, 1.8 gを測る横型剝片素材を用いたナイフ形石器で今回の調査で出土した唯一の旧石器時代に属する遺物。今回の調査期間中に段丘下の調査区近辺で宮田山型のナイフ形石器を表採しており（第23図）、さらにこの1年で貝塚市域内の段丘上の調査でも旧石器時代の資料の増加が見られ、これらは貝塚市内の旧石器時代の遺跡の存在を示唆している。（2～7）は72-O Rから出土した土器と同じく繩文時代晚期に



第22図 石器実測図

属すると考えられる。(4～6)は凹基式石鎌で(5)は $2.44(2.84) \times 1.36 \times 0.24\text{cm}$, 0.6 g を測り、素材剥片は不詳。(6)は $2.84(3.61) \times 7.90 \times 0.37\text{cm}$, 2.2 g を測り、素材剥片は不詳。後世にローリングを著しく受けている。(4)は $1.52(2.11) \times 1.65 \times 0.33\text{cm}$, 1.0 g を測り、素材剥片は横型。(3)は円基式石鎌で $2.16 \times 1.25 \times 0.21\text{cm}$, 0.7 g を測り、素材剥片は縱型。(2)は石錐で $1.73 \times 1.30 \times 0.37\text{cm}$, 0.7 g を測り、素材剥片は不詳。錐部先



第23図 石器実測図

端はB面横折れにより欠損。頭端部は縦の折面で凹基式石鎚製作中に基端が折れたために雖に転用した可能性がある。錐部折損面は $0.25 \times 0.44\text{cm}$ 。(7)は縦型石匙の未製品で $3.84(5.18) \times 2.98 \times 0.60\text{cm}$, 11.2 gを測り、素材剝片は横型。(6)と同様に後世にローリングを著しく受けている。(8)は両面調整削器で $4.41 \times 4.95 \times 0.76\text{cm}$, 18.0 gを測り、素材剝片は横型。刃部とは別に厚型の細部調整により抉入部を縁辺の一部につくりだしている。(9)は両面調整削器で $5.72 \times 3.81 \times 0.74\text{cm}$, 15.2 gを測り、素材剝片は横型。(10)は極厚型の細部調整による長い抉入部を持つ石器で $5.07 \times 5.83 \times 1.36\text{cm}$, 25.8 gを測り、素材剝片は横型。(11)は磨製石斧で刃部を欠損しており、残存している部分は $11.9 \times 6.3 \times 4.5\text{cm}$, 292 gを測る。研磨に先行して石材を8面に面取りしている痕跡が手触りにより確認できる。図版27の下段は今回の調査で出土したサヌカイト剝片すべて。左上段3点は上記の通り連続する細部調整を持つ石器で内2点に自然面を残す。右上段7点は孤立あるいは非連続の細部調整を持つ剝片で内1点に自然面を残す。中段13点は折取るなどで主剥離面の打点を残さない剝片で内6点に自然面を残す。下段12点は主剥離面の打点を残す剝片で内4点に自然面を残す。サヌカイトの産地は肉眼観察によると1点のみ金山産の可能性があり、あとはすべて二上山産と見られる。但し自然面に鎌状の傷を残すものがいくつか認められ、それらは転石を母岩としていると考えられる。他のものより風化が著しいものが1点ある。

(齊屋)

c) 古墳時代～中世

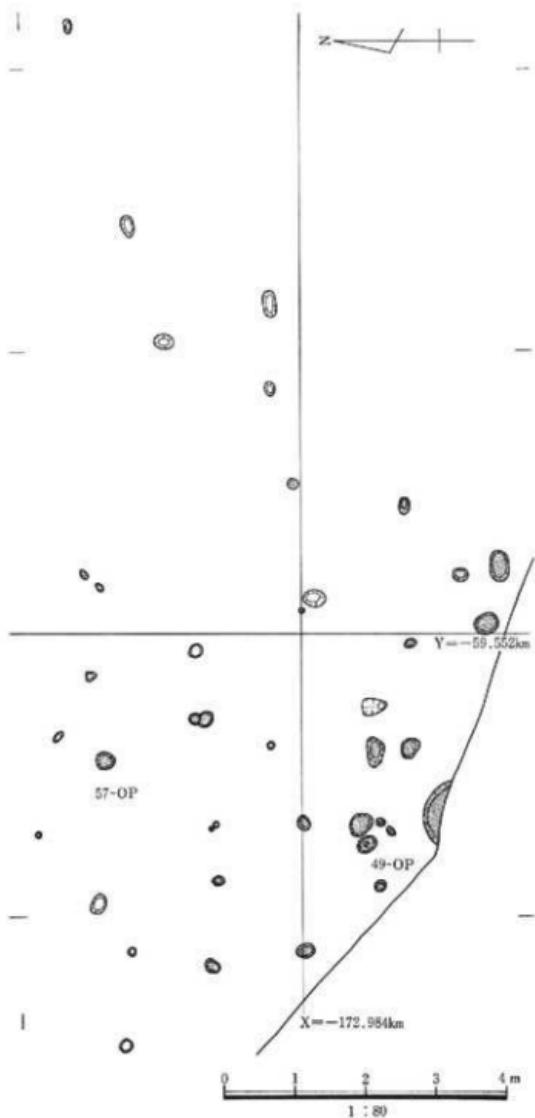
概要

第4層中および第8・9層上面で検出された遺構と、第3・4層出土の遺物がある。遺物には第3層に新たに近世陶磁器類が加わり、第4層と区別される。遺構には、II区中央西寄りと、1986年度調査区に集中するピット群の他、A25S T付近（第17図2）に集中するカニ穴と思われるもの、同WM付近（同図1）に検出された足跡と思われるものがある。いずれも古墳時代以降、15世紀頃までに属すると思われ、時期の限定しがたいものが多い。

(藤田)

II区検出のピット群（第24図）

II区北西部（大D-3-3 A25U K, U L, U M, U S付近）で、ピット群を検出した。これらは構文晚期の流路を検出した第9層の上に部分的に堆積した第8層上面を中心に確認することができた。検出面はTP+2.92m～3.04mである。数は47個あり、大きさは径

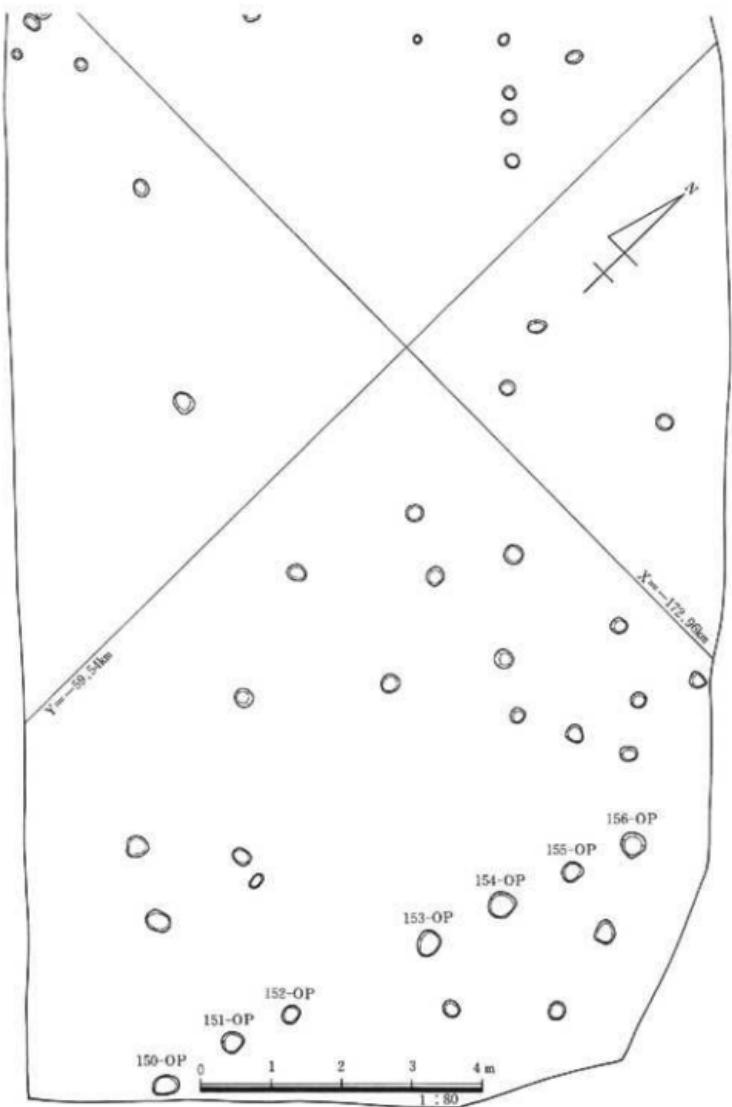


第24図 II区古墳時代・中世ピット群平面図

10cm～90cmで、最も多いのは40cm前後である。いずれも不規則に分布しており性格は不明である。

また検出した中に、実際掘ってみると有機質の浸み込みによる色の違いだけでベースと埋土の区別がつかなかったものもある。これらはピットでないかもしれない。柱痕を確認できたのは49-OPだけである。

埋土は黒色系の粘質土と茶色系の粘質土とに大きく分かれる。その中で黒色系の埋土の57-OPから、器表に火を受け風化した土師器の小片1点が出土した。器表の剥離、2次的に火を受けている状態から製塩土器の可能性もあるが、取り上げた際つぶれてしまった。この他のピッ



第25図 II区中世ピット群平面図 (1986年度調査)

トからの遺物の出土はなかった。

これらのピット群の時期であるが、上を覆う層が6世紀後半から15世紀までの包含層であることから、古墳時代後期から中世までの広い幅で考えざるを得ない。ただ埋土に二種類あることから、古墳時代後期と中世の二時期のものが混在しているかもしれない。図中アミ目で表現したものが黒色系の埋土をしており古墳時代後期、そのほかは茶色系の埋土で中世の可能性が考えられる。

(鶴田)

86年度調査区ピット群（第25図）

86年度の調査区では第4b層を確認できず、第4a層も山側より約4mの間でなくなる。そのためこの調査区内のほとんどは第3b層の下層が第4c層となる。また、第9層上面の西側に顕著な起伏があり、東隅と西隅付近では約25cmの差が認められた。

(峰屋)

遺構 第4c層上面で北東にかたよりがちに、径14~15cm深さ10cm前後のピットを46個検出。埋土は何れも一層で第3b層と同様な層。150-O Pから156-O Pは約70cmの等間隔で北から南に直線的に並ぶ。152-O Pと153-O Pの間は現代層から溝がこの部分で最も深く切り込むためその中央にピットが存在した可能性があり、柵列とも考えられる。しかしピット径が大きく、周辺に柵列を要するような遺構も未確認のためO FとはせずO Pとした。その他建設物になり得るものは確認できない。第4c層は耕作地ではないことがプラント・オバールの分析結果から指摘されているが、このピット群を居住地と結びつける根拠は薄弱である。ピット内の遺物は土器器細片のみで時期を決定し得ないが、第4c層は15世紀の遺物も包含するため、このピット群の時期は15世紀以降と考えられる。第9層上面で104cm×32cm深さ32cmの長方形の土塙197-O Oを検出。埋土は均質的な灰褐色粘土一層で瓦器細片が2点出土。

(峰屋)

カニ穴（第26図）

II区東寄りのA25 S S, S T付近で、径6~8cm前後の小穴が多数検出されている。73-O Rの埋土になっている第8層の粘土が、周辺の凹みにも広がっていて、この粘土部分に集中的に検出された。第4層がこの付近を覆う以前にできた穴と思われる。穴には第4c層と異なる砂質土ないし砂が入っていたため、識別は容易であった。全ての穴を検討した訳ではないが、穴は垂直ないしやや斜めに入り、検出面下10cm前後のところで「く」の字に折れて、横方向に延びている（第26図）。穴のほとんどが粘土分の強いところに集中していること、途中で「く」の字に屈曲していること等から、カニの巣穴と考えたが、専門家に鑑定を依頼した訳ではなく我々の判断であると記しておきたい。

(藤田)

足跡（第27・28図）

A25WM、XOを中心とする一帯の第4層中で検出された。第4層は、必ずしも広い範囲に均質な堆積をなしている訳ではなく、粘質土や砂泥が部分的に認められる。A25WM付近では第4層中の細分の層界がはっきりせず、風化礫混じりの粘質土が局部的に介在していた。足跡と考えたものはこの粘土分の多い部分で検出され、風化礫混じりの砂が埋土になっていた。一部識別困難なものもあったが、全体的に明確であった。

人の足形らしきものと、半月状の深いものが向かい合って単位をなし、動物の足跡と考えられるものがある。前者は長さ22~23cm、幅8cm前後のものが多く、後者には半月形の先端の長さ、径ともに10cm弱のものが多い。断面U字形になる前者はやや問題があるが、後者は牛など動物の足跡の可能性も考えて、ここに記した。
（藤田）

包含層の遺物（第29~32図）

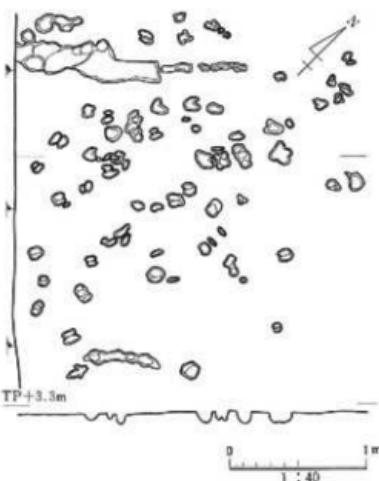
II区で出土した古墳時代から中・近世にかけての遺物はほとんどが包含層内のもので、何れも小片でローリングを受けており実測図化に耐え得るものや、分散して出土するために自らの時期を明確にできるものは少なかった。また、1つの層から出土する遺物に約900年もの幅があり、層位からの時期決定も不可能である。しかしながら時期のわかる遺物で細々とす



第26図 カニ穴断面

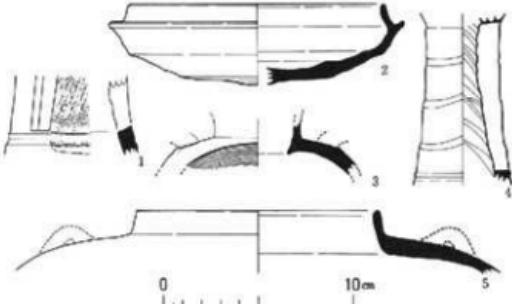


第27図 足跡

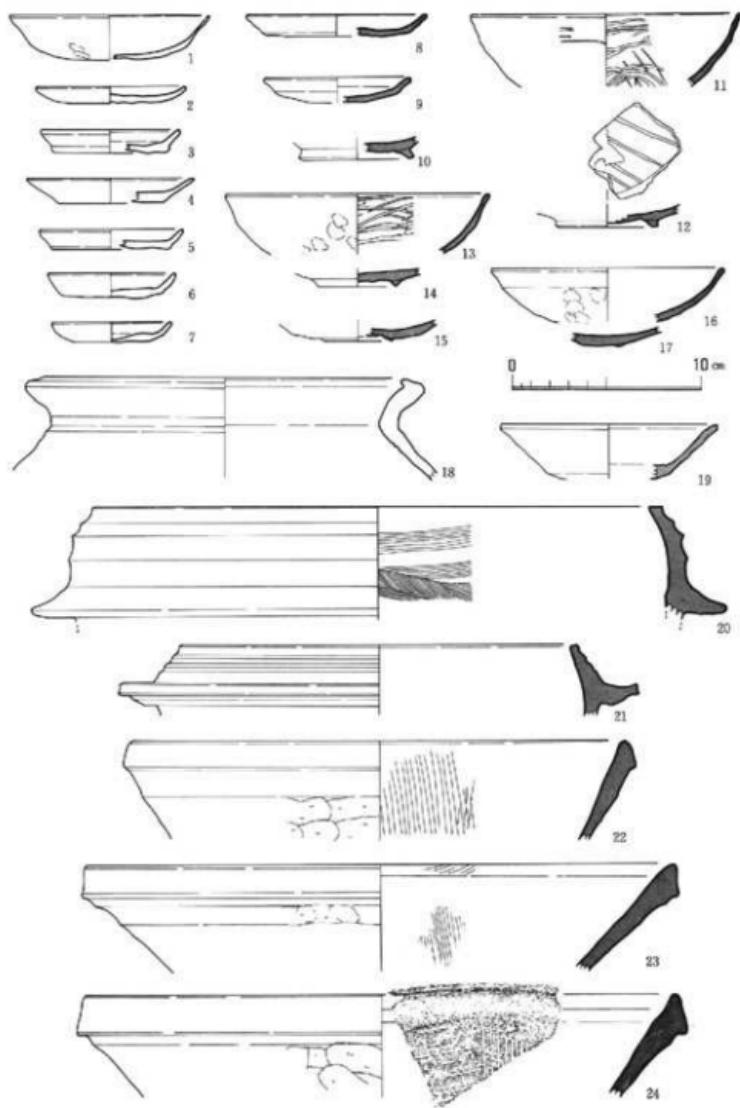


第28図 足跡平面図・立面図

べての時代を網羅しており、そのことが脇浜遺跡の包含層の特徴といえる。第4層は15世紀以降の遺物を含まない。古墳時代後期～古代の須恵器(第29図)。(4)は2段透かしを持つ長脚高坏の筒状部で2方向にある上方の透かしの間の部分。上は坏部に続く外側への屈曲が残り、下は大きく広がる裾部との境になる断面かまぼこ状の短い凸帯と凹線があり、粘土を引き伸ばしたようすが内面にはしばり目として、外面には螺旋状の段として残る。(2)は坏身。たちあがりは短く内傾し端部は丸く、受部は上向きにのび、たちあがりとの境に凹線が1条巡る。体部外面下半部は回転ヘラケズリ。(3)は提瓶の頸～肩部。体部外面の調整は回転を利用したカキメ。肩部と頸部の境は鋭角で、肩部に欠損した耳の痕跡がある。(1)は高坏脚部片で長方形の透かしがあり、外面に細かい波状紋と凹線を施す。以上6世紀後半。(5)は四耳壺で口頭部は内傾してたちあがり端部は丸い。肩部と体部の境はなだらかに屈曲し、肩部には欠損した耳の痕跡がある。胎土にはクサリ礫を含む。8～9世紀。中世の遺物(第30図)。(22～24)は瓦質の擂鉢で浅鉢状の体部外面にヘラケズリを施し、口縁部外側が三角形に突出している。15世紀。(20・21)は瓦質の釜で内傾する口縁部の外面に段を巡らせ、鉢は短く、(21)はやや外反し端部は面をもち、(20)の鉢は傘状に内傾して端部は丸い。(18)は紀伊産の土師質の土釜で口縁部は「く」の字形に外反し、端部は内側に折り曲がる。調整はナデ。胎土に結晶片岩など径1mm以下の砂粒を多く含む。(19)は明緑色の釉薬のかかった龍泉窯系の青磁皿。体部中位で屈曲し、口縁部は浅鉢状に広がり、端部は垂直で、釉薬を拭き取っている。(1～7)は土師器の小皿で、(1)の体部の調整は2段ナデ手法で、下記のものよりやや古い。(2～7)は体部を1段のヨコナデで調整、口縁端部は丸い。底部は粗いナデか無調整で指頭痕を残すが(4)は底部が分厚く体部以上の器壁が非常に薄く、底部ヘラ切りの可能性があり、(2)は底部ヘラ切りで、これらは紀伊の小皿に見られる特徴。以上13～14世紀。(10～17)は12～14世紀の瓦器碗。高台は断面形がしっかりした台形(10・12)から

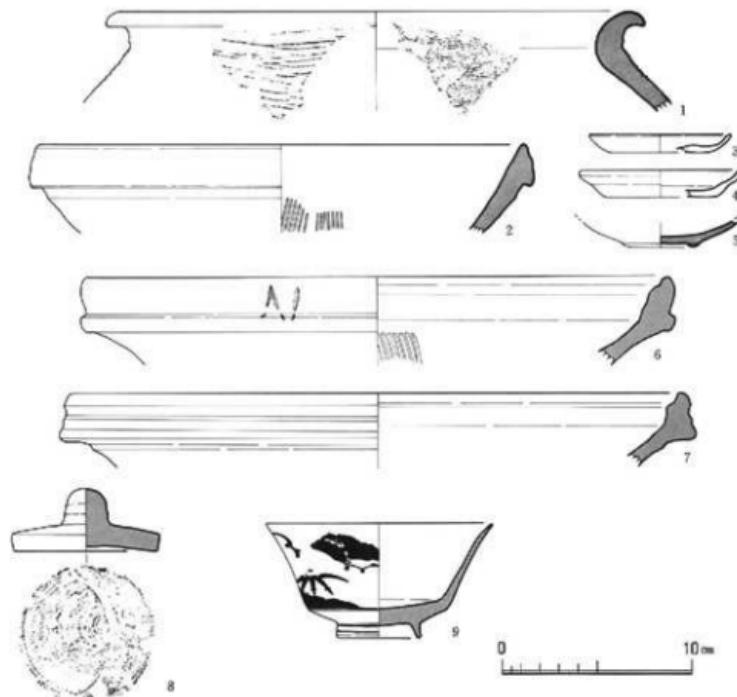


第29図 II区第4層出土遺物実測図

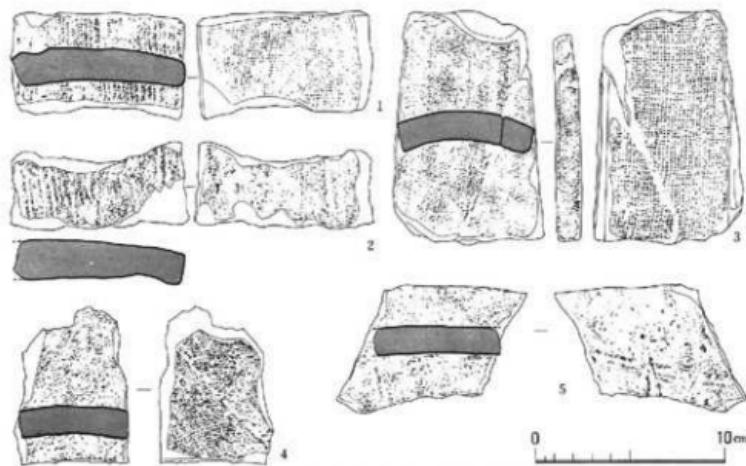


第30図 II区第4層出土遺物実測図

三角形(14)、くずれた三角形(15)、かまぼこ状(17)まであり、平行線状の暗文が残るもの(11・12)、外面にミガキが残るもの(11・13)、内面の圓線状のミガキが密なるもの(11・13)、粗雑なもの(14)など各々の時期の特徴がみられる。(8・9)は瓦器小皿で(8)は体部外面に2段のナデを施す。12世紀末。(9)のナデは1段で口縁部はやや外反し(8)より新しい。2点とも底部に指頭痕を顯著に残す。第3層は中世～近世の遺物を含む。中世の遺物(第31図1～5)。(1)は瓦質の壺で頸部は外方に開き、口縁部は逆U字形。体部外面にタタキ、内面にハケメを施す。(3・4)は土師器小皿で体部にナデを1段施し、底部に指頭痕を残す。(5)はかまぼこ状で貧弱な高台の瓦器碗。(1～5)は14世紀。(2)は瓦質の掃鉢で第30図(22～24)などと同様。15世紀。他に第3、4層出土の遺物として、ミニチュアの瓦器三足釜、東播系掃鉢片、土師質の銷壺、土鍤の大(長さ×径、重量5×3cm, 90g以上)中(3



第31図 II区第3層出土遺物実測図



第32図 II区第4層出土瓦拓影・実測図

~ $5 \times 1 \sim 3 \text{ cm}$, 10~90 g) 小(4 × 1 cm, 10 g未満)などが出土している。近世の遺物(第31図6~9)。(9)は伊万里の染付鉢で底部で屈曲し、口縁部が広がり、外面に淡藍青色で松、竹が描かれている。(6·7)は備前の壺鉢の口縁部。(7)は内面の縁の鋭さなどから、(6)よりも新しい型式。(8)は備前と思われる陶器の蓋。つまみはつくりだし、側面は垂直に切り落とし、裏は回転糸切り。このほか近世の遺物として、唐津、瀬戸、伊万里など陶磁器、備前、丹波、常滑など陶器の日用雑器、土鍤や蛸壺などの漁具が出土している。
(井屋)

瓦 今回の発掘調査では総数258点の瓦類、内187点の平瓦片と思われるものが出土した。平瓦片は大きく分けて、凹面に布目痕のみ有するもの、凹面に離れ砂のみ有するもの、凹面に布目痕・離れ砂とも有するもの、近世の焼瓦がある。また、布目痕を有する総数36点の内、凸面に繩目タタキ痕のみ有するもの7点、凸面に離れ砂のみ有するもの12点、凸面にその両方を有するもの8点である。凹面に離れ砂のみ有する瓦においても、細かい離れ砂(0.1~0.5mm)のもの68点、やや粗い離れ砂(0.6~1.0mm)のもの8点、粗い離れ砂(1.1mm以上)のもの3点と、瓦の総数が少ないわりにはバラエティに富んでいる。

II区・III区の砂堆上の第4層中からは、ほぼすべての4 m区画にわたって、瓦1個以上の検出を見るなど出土数が多い。第4層出土の瓦は布目痕や離れ砂という古い様相をもつもので、焼瓦を含まない。平瓦(1·2·4·5)丸瓦(3)は、II区の第4層から出土したものである。(1~4)は凹面に布目痕を有し、(4)は凸面に離れ砂が付着している。
(黒田)

第5節 III 区

a) 概要 (第33図)

II区境の里道から、海側の市道までの約150mの間をさす。西北隅の工場出入口にあたる一部を除いて約4000平米強を全面調査した。

工事用進入路確保のため、まず調査区南東辺の幅7m部分の調査を行い、終了後北西部の広い範囲を調査した。この一帯は砂地のため、先行調査区では十分な深掘が行えず、とくに中世以前の層は部分的な調査にとどまった。

III区の現況は一部宅地があつた他は、水田になっており、調査区両端で2m弱の落差をもって海側に下っている。調査の結果、ほぼ中央から大きく2つの地形に分かれ、南東部はTP+2.5m前後の高い砂堆部になり、北西半はTP+1m以下の水辺ないし湿地になる。

縄文時代・弥生時代の遺物が少量検出された他、古墳時代以後の流路、掘立柱建物、中世の沼、耕地等が確認された(第33図)。流路、沼を除き、中世以前の各遺構はIII区東半の高い砂堆部に集中し、西半に検出された耕地等の遺構は全て近世以降のものである。

本調査区でも掘立柱建物が検出された一画を除いて、一部TP±0m~-2.5mまで深掘し、より古い堆積の条件を検討した(付論参照)。

(藤田)

b) 縄文・弥生時代

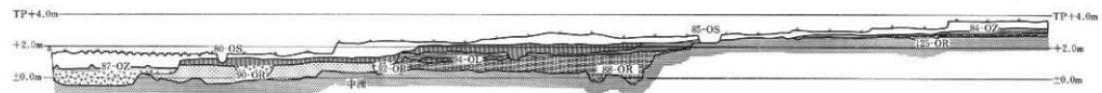
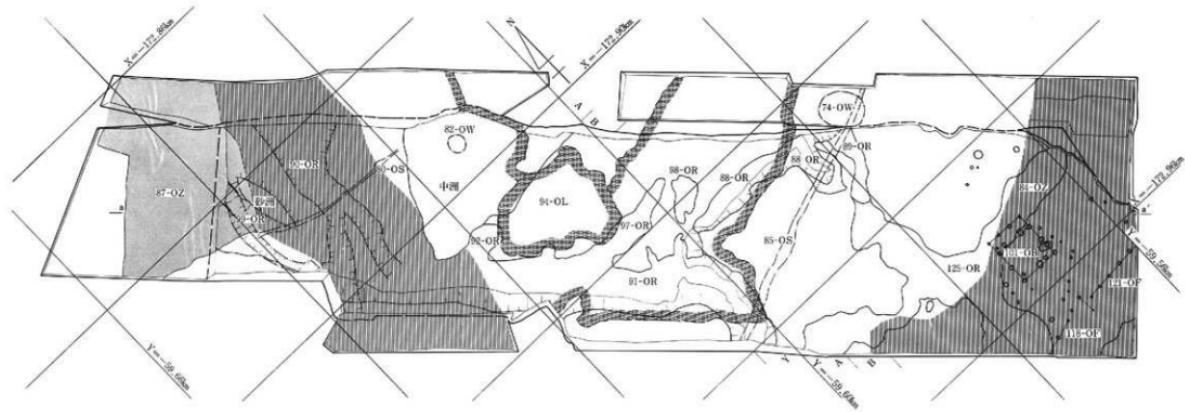
遺物が若干検出されただけで、該期の遺構および、生活面に対応する層順は全く確認されていない。縄文時代に関しては掘り下げが足らなかった可能性を否定できないが、古墳時代以前の砂堆がしっかりとしているIII区南東部に設定した深い試掘坑では、弥生時代相当の層順は認定できなかった。

(藤田)

縄文土器(第34図1) III区中央西寄りの砂堆(91-O Rの左岸部)中から1点出土している。器表が磨耗し、流れてきた可能性が強いが、少なくとも古墳時代前期の水路岸部が形成される時期よりは古い堆積層中にあった。器外面に右下りの条痕が施され、1~4mm大のふぞろいの白色砂粒を多量に含み、少量の黒色鉱物も観察される。褐色を呈し、深鉢形土器体部と思われる。

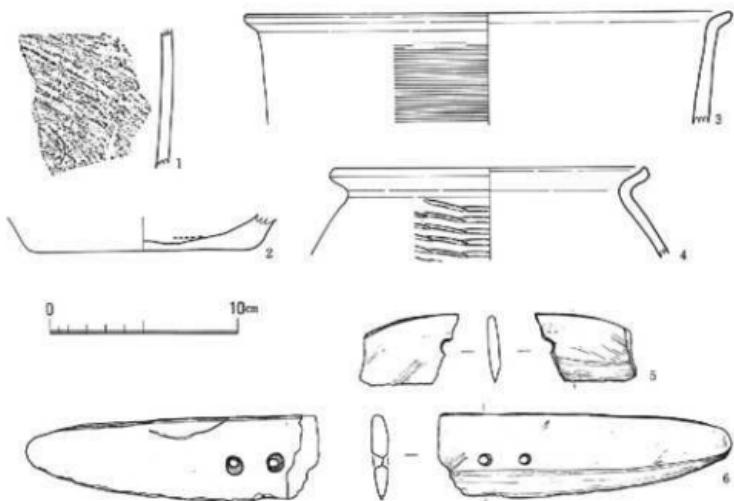
第34図(2)は、III区北西部の古墳時代以後の堆積層中から出土した。縄文土器としてよいかどうか断定しがたいが、胎土色調は本遺跡で検出された他の後世の土器と異なる。径の大きい平底をなし、縄文後期に遡る可能性も捨てきれない。

(藤田)



0
20m
1 : 500

第33図 III区全体遺構配置図



第34図 III区出土土器・石器実測図

弥生土器・石器（第34図）（3～6）は弥生時代に属する遺物。（3・4）は甕。（3）は94-O Lの肩部の最下層で、91-O Rの埋土の最上層に相当する層から出土した。口縁部は短く外反し、頸部との境はシャープ。頸部は胴部から外反気味にのび、外面にはハケメ調整工具によって描かれたような、浅く幅広の直線文が巡る。口縁部と内面はヨコナデにより調整。焼成は良好で堅固。胎土は2 mm以下の小礫を多量に含む。中期前甕。（4）は口頸部は外反し、端部を上につまみあげており断面を三角形に仕上げている。肩部はなだらかで、外面に1 cmあたり2.5本の太目で浅い平行なタタキを施しており、一部に黒斑を有する。内面の調整は不明瞭。胎土には径1 mm以下の長石らしい白色礫を含む。中期後甕。（5・6）は石庖丁。（6）は125-O Rの流路内より出土した。残存長15.15cm、幅4.48cm、厚さ0.77cm、紐孔は外径×内径で、 $1.1 \times 0.73 \times 0.45\text{cm}$, $0.98 \times 0.96 \times 0.45\text{cm}$ を測る。形態は外弯刃半月形であるが背部もやや丸みを帯びている。外弯刃であることと紐孔の位置が背部よりも刃部に近いことなどから前期に属するものと考えられる。石材は結晶片岩と見られるが風化が著しくあまり良質のものとは思えない。（5）は89-O Rの流路内より出土した。残存長5.1cm、幅3.55cm、厚さ0.60cm、紐孔は $0.80 \times 0.80 \times 0.65\text{cm}$ を測る。直線刃半月形。石材は結晶片岩で（6）よりは良質。前期～中期。（峰岸）

c) 古墳時代

古墳時代の遺構検出面は、疊混じり粗砂・細砂・砂礫など地区によって少しづつ様相の異なる第9層上面にあたる。TP + 2.8mからTP - 0.3mまで起伏に富み、地形的にはⅢ区中央付近で南東の高い砂堆部と北西部の河川敷部分に分かれる。

前半期の遺構は、自然流路以外明確なものはなく、A24HW付近を中心とした土器溜りと、88・91-O Rなどの流路がある。この一画を中心に海浜の遺跡を特徴づける製塩土器、飯蛸壺等が多数出土している。Ⅲ区北西半の低地部は91-O Rとこれに合流する2本の大きな自然流路の浸蝕・堆積作用によって作られたと思われ、2本の流路の合流点北側に中洲状の砂堆を作っている（以後この部分を中洲と呼ぶ）。A24HW付近の土器溜りは、91-O R左岸にあり、その東端の一部がわずかに調査区にかかったようにも見受けられる。

後半期の遺構は一部7世紀代以降にかかる可能性のあるものを含め、Ⅲ区南東の高い砂堆部分に集中している。地形的には前半期と大差なく、Ⅲ区北西半は91-O Rの流路を中心として1・2の流路が認められるだけである。ただ91-O R内出土の遺構からみれば、91-O R左岸北寄りにも後期の生活面が伸びていた可能性がある。

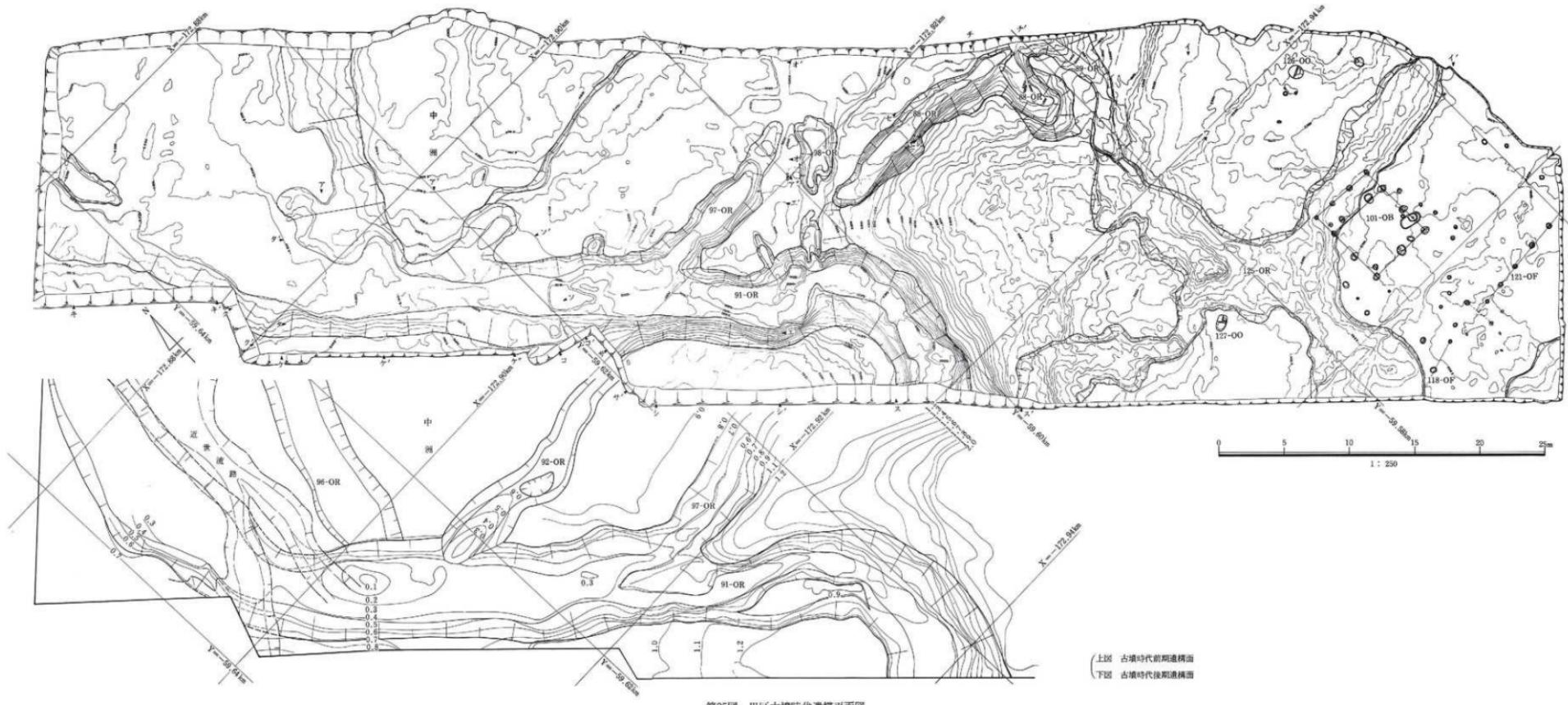
(藤田)

88-O R (第35~37図)

88-O Rは古墳時代前期に属する流路で、砂堆と砂洲の間を東西方向に流れる水脈のうち、最も砂堆の隙を流れている一条である。このほか幅約20mの砂堆・砂洲間には、92・97・98-O Rなどがほぼ同一方向の流れをみせている。また88-O Rの流路に流れ込んでいる小さな開析谷にも88-O Rという名称を付した。

小さな開析谷は砂堆上面の開析作用で生じたもので、水成の灰白色細砂層や植物遺体を多く含む黒色砂混粘土層の砂堆で埋没している。一般に下層の堆積土中から木製品や自然木が多く出土し、上層の堆積土中からは土器が多く出土した。谷地形の上端幅は約3.2~4.5m、肩部と底の比高差は60~80cmを測り、底部はTP + 1.9m ~ + 0.7mまで緩かな傾斜をみせている。また砂堆上の88-O Rの東側には、やはり開析作用で生じた89-O Rがあり、土師器壺などが出土しているが、これら二つの開析谷が同時に存在したものか、先後関係があるのかは不明である。

東西方向の流路は砂堆の落ち際を南の肩部とし、上端幅2~3.5m、下端幅1~1.5m、長さ19m以上を測り、91-O Rとの合流点直前で底部は立上がりをみせ、全体としては長楕円形の土堆状を呈している。第37図の下段の図は、同上段の右図よりもやや上流の土層断面であるが、海側の肩はTP + 1.0mを測る。これに対して、下流の海側の肩はTP + 0.6



第35図 III区古墳時代遺構平面図

mと低い。また上流の埋土は灰色砂礫であるのに対して、下流では両側に緑黒色粘土が堆積して幅が狭まった後、中央部に緑灰色砂礫が堆積して埋没している。この水脈埋没後も砂堆・中洲間は浅く広く、水が流れている。上段の右図の下流地点においては、遺物は図でいちばん上層の暗オリーブ灰色砂礫層からの出土が最も多かった。下段の図で山側肩部がTP+0.5mと低いのは、88-ORの開折谷や89-ORの流水に削られたからである。88-ORの東西方向の流路の埋土である灰色砂礫の上層に堆積している水成層は、これら砂堆上からの流れに起因すると思われる。

(黒田)

遺物

遺物は開折谷・東西方向の流路ともに豊富に出土している。特に開折谷と流路との合流点では、TP+1.0m付近から完形の土師器壺が2個体、並んで出土している。合流点は遺物の溜り場をなしており、土師器壺を含む層の下層から木製品や自然木が数多く出土している。開折谷の上方でも、上層から土器類が、下層から木製品・自然木が多く出る傾向にある。土器類は土師器壺・壺のほか、製塙土器・鉢壺形土器が数多く出土している。東西方向の流路およびその周辺からも、土師器壺・壺のほか鉢壺形土器が検出されているが、これらは流路埋土の土層や肩部からの出土が多い。

(黒田)

土師器(第38~40図) 口縁部と底部、脚部の総個体数は全体で約360点になり、この他器種の確定し難いような小破片が、多数ある。内訳は、壺90点、甕175点、高環70点、鉢20点、その他5点である。88-ORからは60点が出土している。

壺は全部で10点程度出土している。先ず分類をおこない、以下それに従い説明する。

I：強く外反しながら広がり端部付近ではほぼ水平にのびる口縁部を持ち、端面は上下に拡張するもの。

第38図(3)に示した1点が出土している。調査全体でもこれだけである。

II：垂直気味の頸部から屈曲し、水平方向にのび更に斜め方向に広がる口縁部をもつもの。

3点出土し1点を示した。第38図(1)は口径約30cmを測る大形品である。口縁部内外面は横方向に強いナデの後、縱方向のヘラミガキである。

III：くの字状に外反する頸部から屈曲して、垂直方向に立ち上がる口縁部をもつもの。

第38図(2)は口径24.3cmを測る破片である。口縁端部はやや肥厚し平坦面を持って終わる。口縁部内外面はヘラ状のものによりナデを行なっている。灰白色を呈する。和泉、河内地方で通常みられる器形とは異なる。

また、頭部が同じで口縁部が内傾する大形の壺も1点みられる。

IV : 口縁部が斜上方に直線的あるいは外反気味に広がる口縁部をもつもの。

第38図(4)に示した1点が出土した。胎土は径1~3mmの石英や長石が目立つが、他に径5mm前後の結晶片岩も含まれる。なお結晶片岩を含む土器は全体でも1点だけである。

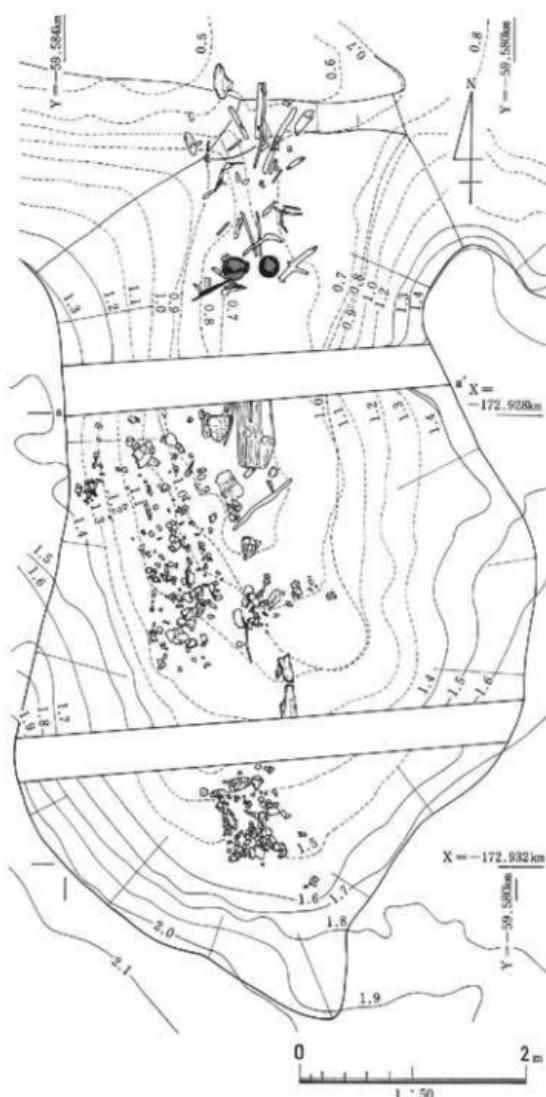
V : くの字状に外反する口縁部を持ち球形の体部、丸底の薄手小形品。

甕は約30点が出土している。これも分類をおこなう。

I : くの字状に外反する口縁部に、やや縱長の脚部がつき平底のもの。外面には横あるいは斜方向の粗いタタキ、内面にはハケまたはナデが施される。

第38図(5)は口径

11.3cm、器高12.5cm



第36図 III区 88-OR 遺物出土状況図



第37図 III区 88-QR土壤断面図

と小形品である。タタキ目は1cmあたり1本の溝と粗いが、磨滅のため一部は消えている。この他に平底の底部が4点ある。

II：くの字状に外反する口縁部で、端部はつまみ上げられる。外面には右上がりの細かいタタキの後タテハケ、内面には頸部までヘラケズリが施される。

2点出土し共に図示した。第38図(6・7)は共に口縁部のつまみあげがにぶく丸みを持つ。復元口径18.0cm前後と大形である。外面には煤が付着している。褐灰色を呈す。

III：直線的あるいは内弯しながら外上方にのびる口縁部で球形の体部丸底のもの。口縁端部の形状は、丸く終わり肥厚するもの、平坦面で終わり肥厚するもの、内傾する面を持つものの、3つがある。外面はハケ、内面は頭部よりやや下までヘラケズリである。

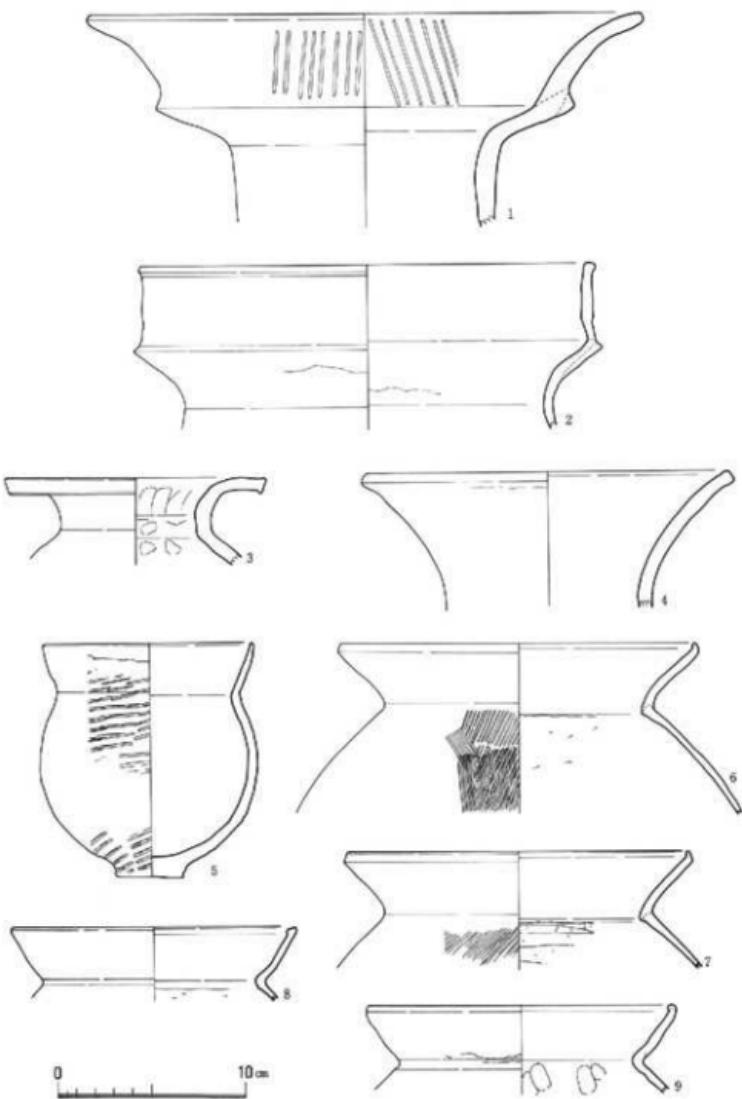
全部で15点出土しており、内4点を示す。第38図(8)は口縁端部が若干内傾している。また第38図(9)のように口縁端部を折り返しによって肥厚させるものは3点ほどである。その折り返し方の粗雑なものが目立つ。第39図(1・2)は上層から2つ並んで出土した。この流路の最終埋没段階に入ったものと考えられる。口径15.0cm前後、器高22.0cm前後である。全体に煤が付着する。

豪还は約10点出土したが全体の形状の分かる例はない。柄部と脚部に分けて分類する。

1a：杯底部は内側しつつ広がり、屈曲の後大きく外反するもの。

第40図(1)は復元口径21.1cmである。内外面ともに縦方向のヘラミガキを丁寧に施し、外表面はさらにヨコナナドをする。

1b: 抱膝部は直線的に広がり、屈曲の後大きく直線的に広がるもの。3点の出土があ



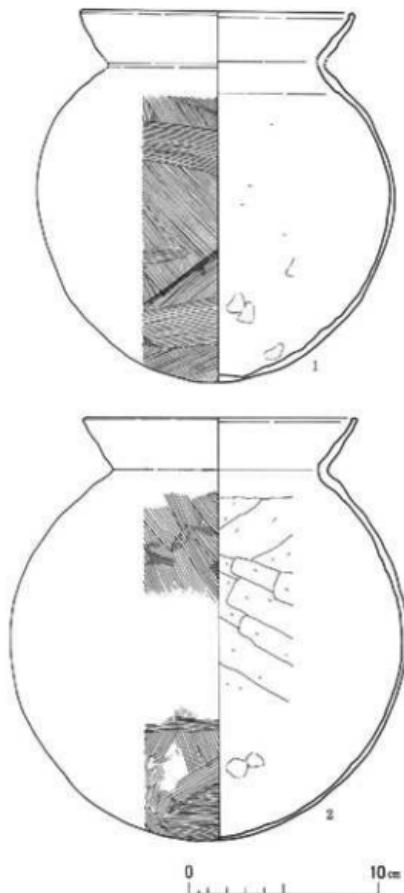
第38図 III区 88-O R 出土遺物実測図

り第40図(2・3)の2点を図示した。

I c : 坯底部から口縁部への境界に明瞭な稜を持たないもの。1点出土している。

I d : 坯底部から屈曲して立ち上がり、さらに斜上方へのびるもの。

II a : 柱状部から脚裾にかけてスムーズに広がるもの。3点の出土があり1点を示した(第40図4)。中実の低い脚柱である。



第39図 III区 88-OR出土遺物実測図

II b : 直線的にのびる柱状部から大きく屈曲して脚裾に至るもの。

II c : 外寄気味にのびる柱状部から大きく屈曲して脚裾に至るもの。

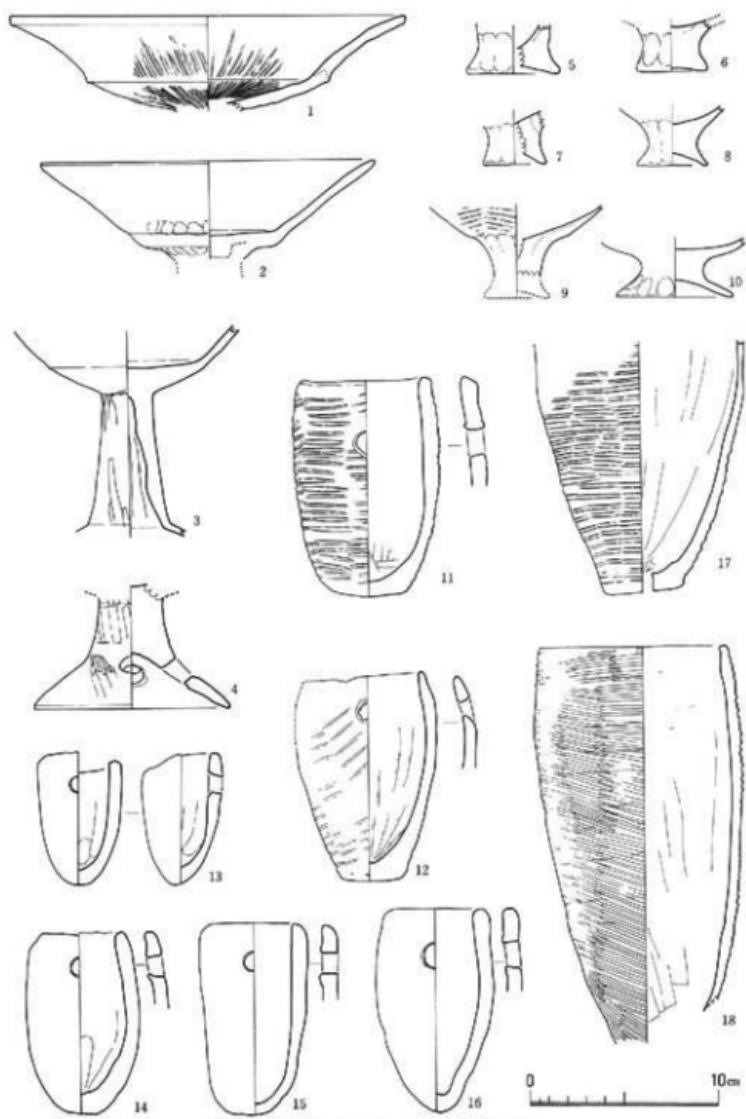
なお I d, II e はここからは出土しなかった。

鉢は図にないが、いわゆる二段屈曲鉢の小片が2点出土している。

これらの土師器は良好な出土状態をしたわけではないが、一つのまとまった土器群としてとらえた場合、従来布留式壺の典型とされた壺田と共に型式的に古いくつかの土器が混じっているという状況を呈している。これら土器群は今回、布留式の古い段階の範疇でとらえておきたい。

(蘭丘田)
製塙土器 (第40図5~10) 約20個体弱ある。散漫な出かたながら完形の土師器壺2点が出土した土器溜り付近で検出されたものが多い。ここでは体部片も少量認められたが、接合はできなかった。

本遺跡で出土した製塙土器は脚台



第40図 III区 88-O R出土遺物実測図

が付くタイプばかりで大きく3種に分けられる。従来の東南地方の分類と基本的に通じるが、本遺跡でのI・II・III式の分類としてまず概要を示しておく。第49図を例にとって3分類を示すと、I式は5cmを越す高い脚台をもち、坏部が直線的に斜め上方に開いて立ち上がるもの(1・2)。II式は脚台が低く、坏部が直線的に上方にたち上がるるもの(3~24)。III式は脚怪が小さく、坏部が腕状に開いて立ち上がるもの(25~26)とする。

88-ORではII式(第40図5)とIII式(同6~10)が出土している。出土量が少ないので比較の対象には適さないが、III式が2/3を占め、本遺跡全体の出土量に占めるII・III式の相対比と正反対になっている。6点図示したが、他はあまり図化に耐えない。

II式に属する(5)は脚端径約5cm、くびれが小さく低い脚台部をなす。(6~8)は一般的なIII式の脚台に属し、脚台底面の凹みが2mm以下のものと5mm前後のものがある。

(9~10)は本遺跡III式の中では類例の少ない脚台に属する。(9)は端部が欠損しているが、小さく開くと思われ、体部には溝間3mm大の細いタタキ目が横位にみられる。(10)は脚端が広がり6cmを越え、III式では最大のものである。胎土にはいずれも多くの砂粒が含まれる。(5)は2mm大を越す砂粒が多く観察され、(2~6)は1mm以下の均質な粒が多い。II式とIII式の基本的な違いの1つである。

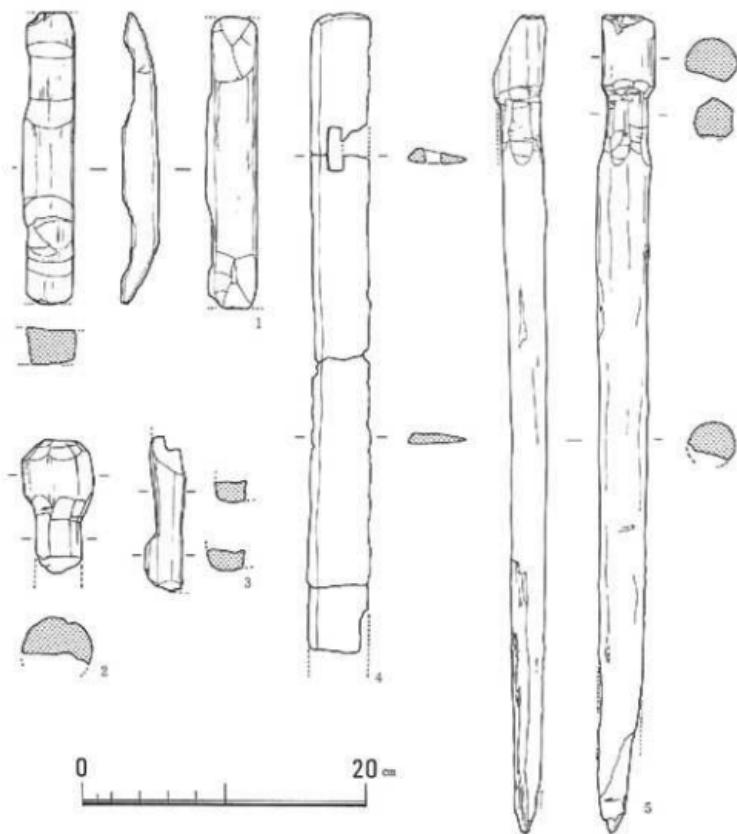
(藤田)

蛸壺形土器(第40図)コップ形といわれている蛸壺形土器は、今回の調査全体で、約470個体が出土している。これらの蛸壺形土器は底部の形状(平底、丸底、尖底、凹み底)、法量(小形=飯蛸壺、大形=蛸壺)、外面調整(タタキ、ナデ、ケズリ)の組み合わせから分類が可能である。以下飯蛸壺、蛸壺と呼び、両者を総称して蛸壺形土器とする。470点の内訳は飯蛸壺が約390点、蛸壺が約80点である。また、飯蛸壺の中で分類可能な完形品と底部の残るものの合計は約150点を数える。

この流路からは飯蛸壺約85点、蛸壺約10点が出土した。飯蛸壺は平底でタタキ目のあるもの5点、平底でタタキ目のないもの5点、丸底・尖底でナデのもの10点が出土し残りは分類不可能な小片である。流路内ほぼ全域から出土するが、A25HFからの出土量が多い。

(11~12)は外面にタタキ目がある。内面はいずれもヘラ状のものでナデた後口縁部付近をヨコナデし平滑に仕上げる。(11)は1cmあたり2本の溝のタタキ目が底から見ると八角形に施される。この類は1点だけである。(12)は1cmあたり1.5本の溝のタタキ目が斜方向に施されるが、半分程度は磨滅で消えている。焼成前に穿孔された体部の紐穴は不整形になっている。紐ずれによるものと思われる。口径6.5cm、器高11.2cm。この類は4点ある。

(13~16)は丸底、尖底で内外面共にナデにより平滑に仕上げる。(13)は口径4.5cm、器



第41図 三区 88-OR出土木製品実測図

高7.1cmを測る小形品である。口縁部は縫穴のある方から背面に向って傾斜している。使用によりすり減ったものと思われる。(14~16)は同一地点からの出土である。口径5cm前後、器高10cm前後である。これら3個体は同じ土を使用したと思われる。

(17・18)は法量から銷壺と考えている。外面はタタキ、内面はヘラ状のものによるナデで平滑に仕上げる。(17)は口径10cm前後で平底と思われる。外面は幅5cmにわたりタタキ目が消えている。縫穴はない。(18)は通常の鉢と比べて体部が長い。形態的には飯蛸壺をそのまま大きくした形となる。底部の穿孔は焼成前のもので一部磨滅している。(圖41)

木製品（第41図） 今回は調査中から木製品や自然木をとりあげつつ調査を続け、コンテナにして約75箱を取り上げた。その全てを水洗いした結果、木製品及び板状を呈するなど加工を加えていると思われるもの約30点を確認した。その他約400点は加工痕がみつからなかったことから自然木と判断した。

88-O Rからは、木製品と自然木とだけが混在して出土する層からの出土がほとんどである。（1～5）に示した木製品で機能の明らかなものはない。他は杭先、板状のものが約10点と自然木である。

(1)は最大長20.7cmである。この製品は両側共に欠損しており中央部だけが残ったようである。側面は台形状を呈し、その長側辺に二つの抉りが入る。(2)は幅4.9cmを測る。全体が半分に割れている。回りは直線的で残存部で4面あるので本来は8面あったと考えられる。(3)も同様に削りこみのある木製品で残存長11cmを測る。(4)は幅5.3cm、厚さ1.1cmの薄い板にはぞ穴があく。図の下は欠損している。(5)は全長58.1cm、最大径3.7cmを測る。頭部から斜めに削りこんでいる。また頭部より5cmのところで抉りが入る。下部は火を受けて欠損している。

(鶴立田)

97-O R

調査区のほぼ中央のA24 E WからA25 E Aにかけて検出した流路である。88-O Rの北側で、88-O Rとはほぼ平行に走る。

検出面は、南側肩部については88-O Rとの間の小さな中洲状の砂の高まりであり、北側肩部については層序の節で無遺物層とした細砂層である。

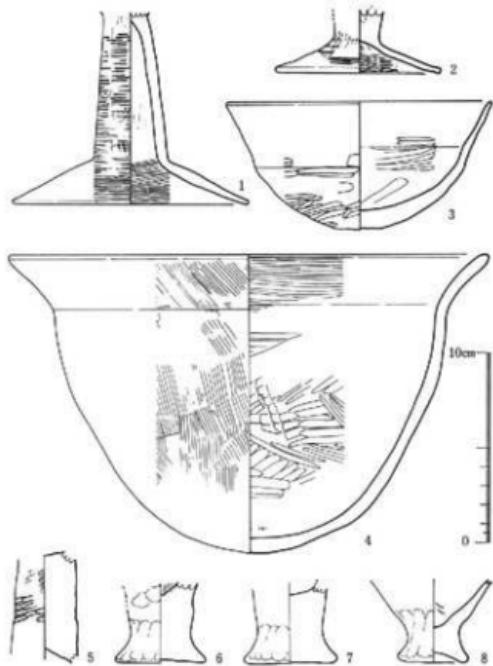
この流路はA25 E Aで消えてしまい、それより東側では確認することができなかった。検出できた長さは約16mで、幅3m、深さ30～50cmを測り、検出面の肩のレベルはTP +0.4～0.15m、底はTP ±0～-0.3mである。

流路はA24 E Yで一旦切れかけ、それぞれ舟底状を呈する。この状況からすると、さらに東側に流路の続きが存在すると思われる。埋土もA24 E Yを境に異なり、それより東側では細砂・シルトが堆積し、西側では砂礫が堆積していた。流路としては、西側の方が先に埋まったと考えられる。

(鶴立田)

遺物（第42図）

古墳時代前期の土師器、製塙土器、銷壺形土器が出土している。出土地点は流路の西寄りの砂礫層中に集中して認められたが、その量は多くない。第42図(4)に示した鉢はA24 E Xの中層から単独で出土した。他の遺物は小片がほとんどであるが、91-O Rとの合流



第42図 III区 97-OR出土遺物実測図

地点に近い A24 E W から
数点の製塩土器の出土が
目についた。 (藤田)

土師器 (第42図 1 ~ 4)

小片が多いが、(1 ~
4) の 4 点を図示した。
固化できなかったものも
含めて、出土した総数は、
壺III、高壺 I b、II b
(1) と、蓋(2) 鉢(3、
4) など約20点である。

(4) は口径25.4cm を
測る大形の鉢である。体
部外面には、溝間隔の粗
いハケ目が縦方向につく。
体部下半には煤が付着し
ている。 (藤田)

製塩土器 (第42図 5 ~

8) 8 点出土している。

91-ORとの合流点にあたる A24 E W 付近でこのうちの 6 点が出土している。I・II・III
式があり、合流点付近では II 式が 5 点出土している。

(5) は、I 式の中でも脚台部が長い棒状になったタイプで、本遺跡内では別に 1 点出土
している。89-OR の東端、第35図上には表現できなかったが痕跡的に続いている A24 D
B 地点出土である。脚台部に平行タタキが施されている。深いタタキであるが、部分的に
残っているだけである。脚内面の上縁部分は黒く変色している。(6・7) は II 式に属する。
脚端径は約 5 cm あり、底内面はほとんど凹まない。下端から約 1 cm のところでくびれ、
壺部底まで 3.5 cm 強ある。このタイプは本遺跡製塩土器の 2/3 を占める II 式の中では、数
少ないタイプである。水路内出土のためか、やや磨滅しているが脚端からくびれにかけて、
指押え痕がみられる。(8) は III 式に属する。壺部の立ち上がりが他の III 式に比べ、やや直
線的で立ち上がる角度も強い。脚台くびれ部には指押え痕がある。

(藤田)

91-O R (第35・43図)

III区ほぼ中央のA24 J Y区から調査区北西隅のA19 T G、T R、U S区方向にかけて、全長約80mにわたって検出された古墳時代の自然河川である。付近の地形による限り、現木川とは別の水系をもつ川と考えられる。88-O Rと合流するA24 G Y付近以南では、川の两岸がはっきりしているものの、ここより、北側では川岸は必ずしも明確ではない。所々に大小の砂堆や舟底状の流路を形成していて、河口部の氾濫原の様を呈している。

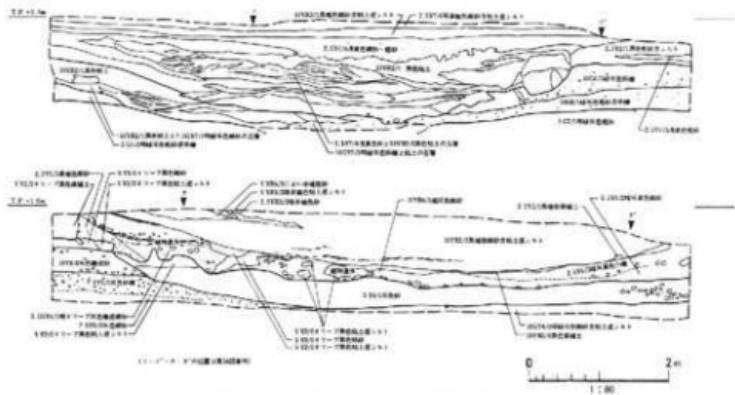
上流部と下流部の川底は、それぞれTP-0.2m~-0.3mを計り、後述の河川内堆積物の様相からみても、洪水等の一時的な増水時以外は日常的な潮の干満の影響を受ける程度の、潛水状態に近いゆるやかな流れであったと思われる。

91-O R右岸部に広がる三角形の砂堆(中洲)は、88-O R以北では最も発達したものである。この付近には後世に、調査区を横断する形で数条の自然流路があったようであるが、充分にこの水路を検出し得なかった。したがって、砂堆の現存形を確實に捉えているとは言い難いが、A24 B S付近の川底との比高差は約1.3mを測る。南東側が高く、北西方向が低い時期を経るに従って、南側に拡大している。砂堆の上層は細砂~中砂からなる均質な砂が覆い、下層にいくに従って礫層に暫移する。この礫層は砂堆の北西部で中~大礫が目立ち、南縁では小礫が多い。前述のように、北西部の礫層は91-O R下流の全体に広がってその基層をなしている。

古墳時代前期、後期2面の河川敷を識別したが、河川の発掘にあたっては、主に水路内に堆積した植物遺体を多量に含む軟らかい有機質の層と細砂、粗砂の互層部分およびこの中に含まれる遺物を手掛りにして検出したものであり、掘削前に平面的に確認できた部分は少ない。とくに88-O R合流点以北では、有機質の層の広がりを主に追跡したもので、當時流れていた水路に相当する部分を検出したに過ぎない。川底あるいは、後述する中洲部分の岸の検出は、上流部分では段丘下に続く砂堆の層、下流部分では中洲の形成の基層となる中~大礫層の検出に掲ったが、しばしば有機質層の存在と、遺物の有無に基づいて該当時期のものと判断することになった。

A24 J Y付近の右岸には、出水時の攻撃面が形成され、東岸の砂、礫が河川内堆積物に混じっていた。ここでも薄いながらも有機質層がその直上、直下を覆っていた。対岸部分は細砂、粗砂と共に細砂まじりの有機質層、有機質が厚く堆積し、その層中に多量の土器が溜って、川岸の肩部を形成している。

A24 C S付近から上流には、舟底形をした深み(淵)が数箇所にみられ、とくに88-O



第43図 III区 91-OR 土層断面図

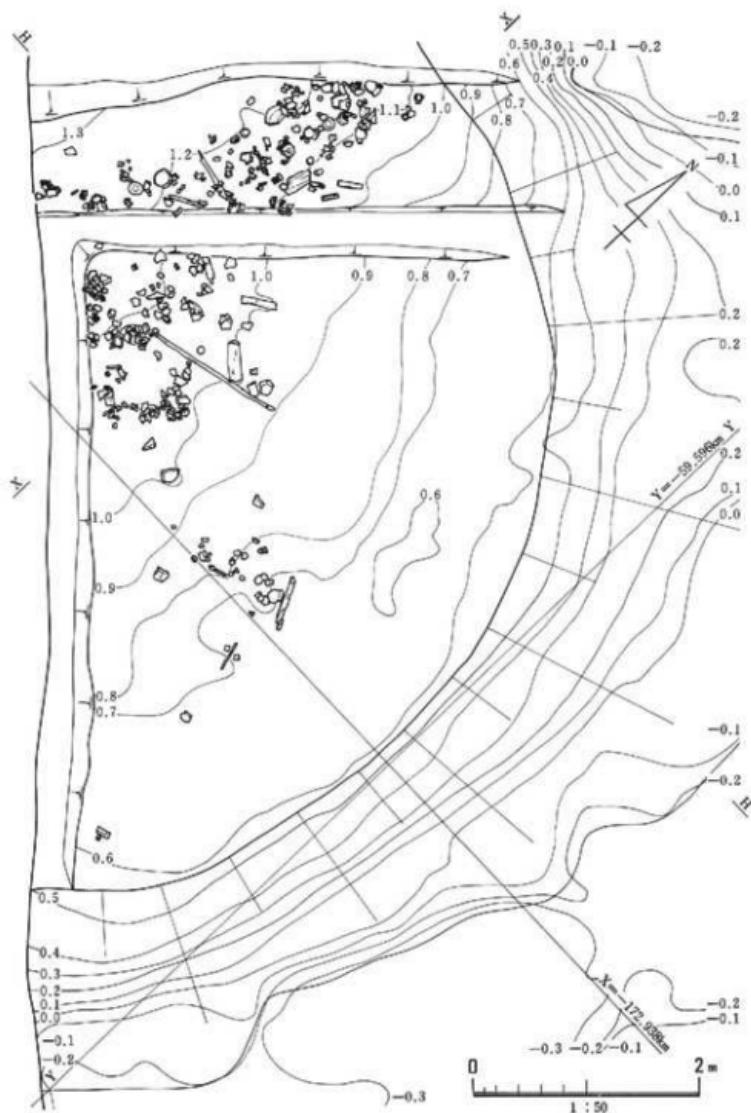
R合流点すぐ下のA24GX、上流の同IY～JYにかけて検出された灘は深く、TP-0.3m以下になり、一部はこの付近の砂堆の基盤になっている礫層に達していた。

下流のA19以北は、時に20cmを越えるものを含め大・中疊が広がり、その直下に中砂、細砂、有機質の薄い層が疊間にひっかかるように堆積しており、場所によって小さな砂堆もみられた。ゆるい流れをもつ浅瀬のような部分であったと思われる。この疊の中にも古墳時代前後期の遺物が僅少ながら混ざっていたがほとんど、上端部に限られていた。

この疊層は、右岸部に広がる三角形の中洲の北西部部分の基部をなしている。右岸部の中洲は本来この付近まであったものが、古墳時代の水路のために、削られたのかも知れない。

91-ORとこれにかかる遺物は、91-OR内と右岸部の砂堆、およびA24HW、HX、IXを中心とする左岸肩部土器盛りのものとに大別される。これらの遺物は、2~3点の弥生時代に属すると思われるもの、微量の6世紀前葉に遡るものと、古墳時代前期のほぼ布留式に平行するものと、6世紀後半期のものがほとんどである。河川内出土遺物と周辺出土遺物の接合関係から、この河川の機能していた年代の上限は、古墳時代に求められる。その下限の年代を示すものとして特筆されるのは、第71図(8)に示した、硯に転用された壺蓋がある。奈良時代に属すると思われるが、直線距離で約40m離れたA24DUとA25ICで出土した。前者は、中世墳の沼沢地の面の掘削開始直後、この付近に自然河川の形跡を確認する以前の層で出土したもので、河川がほぼ完全に埋没して旧状を失った段階のものである。91-ORの下限はこれ以前に求められる。

《釋名》



第44図 III区 91-O R 肩部遺物出土状況図

91-O R 肩部の遺物（第44～51図）

A24 GWからHW、IW、IX付近の91-O R左半部の広い範囲にわたって認められた土器溜りである。古墳時代前期の土師器、製塙土器、鉢壺形土器が多量に検出され、出土量は本調査では唯一最大とさえ言える。

流路内埋土と同質の有機質の層に細砂、微砂が混ざる20～30cmの層中に少量の木片とともに土器が含まれ、古墳時代後期流路の肩部をなしている。有機質層の状態から、何らかの理由でTP+1.0m前後まで潜水した時期が2～3度あり、その水際部分に土器溜りが形成されていたと考えられる。

基本的に投棄された土器群と思われ、遺物の検出密度に多少濃淡はみられたが、ブロックを形成する様子はなく、その堆積を層位的に区分することもできなかった。

流路内に転落した一部の土器片を除けば、土器はごく近接した位置での接合関係がみられ、各個体ごとにまとめて出土している。しかし、完形に復元できるものは、小品を除けば少なく、本来完形の状態でおかれたものはなかったようである。

土師器は一応全器種がそろっている。中でも製塙土器と鉢壺形土器が目立っていた。製塙土器は、今回調査検出数の8割がこの一帯で出土している。この2種の土器がそれぞれ顕著なブロックをなしているところはなかった。

製塙土器、鉢壺形土器には従来の型式觀からみれば、2～3の型式に分けられるものを含むが、遺物、土層の堆積状態からみれば、むしろ單一期に近い様相と考えておきたい。

（壺III）
土師器（第45～48図） 約160点が出土したが全破片数でみると7割程度を占める。

壺は全部で約30点が出土している。

壺IIは8点あり、第45図(1～3)の3点を図示した。(3)には装飾がつく。

壺IIIは14点あり内2点を図示した。第46図(1)は口径19.8cm、器高約35cmを測るほぼ完形品である。口縁端部は外側に拡張し、端面は僅かに凹む。

壺Vは口縁部付近の小破片が多いので壺IVとの区別が困難なものが多い。第47図(4・5)は口径9～11cm、器高12cm前後を測る。いずれも火を受けている。内面を先が二つに分かれた工具でナデている。(4)の底部外面はタタキの後削って丸底気味にする。これらの土器の他、第46図(3・4)第48図(3・4・6)の土器とは同じ胎土と思われ、同一層位から近接して出土した。

その他、壺IV（第45図4）、装飾のつく口縁部小片（同5）、底部（同7～9）がある。また小型丸底壺は4点ある。第45図(10)は復元口径10.6cmで、口縁端部は尖り気味に終る。